
fallout ～『異世界放浪』モノでgeckを使用した場合～

代継 洋佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

fallout 『異世界放浪』モノでgeckを使用した場合

【Nコード】

N8636Y

【作者名】

代継 洋佑

【あらすじ】

この話のあらすじを知りたいって？そうだな・・・、いいぜ。俺こと芦沢幸助あしざわしゆすけは会社の休日在家で過ごして筈なんだ。それがどういう訳か目が覚めたら何の冗談か【fallout】の世界に来てたのさ。それでGACKなんて反則なモンまで手に入れて。え？これ以上聞きたいって？駄目駄目、これ以上知れたかったら本編を見た方がいい。———と、こんなんでいいですか？あ、はい。はい。分かりました~~~~、ってヤベ！マイクマイク！

ブローグく黒くて艶々したアイツく（前書き）

この小説に登場する団体、企業、個人等は現実とは関係があるかもしれない。

あ、いえ。あります。

ですがこれで商売するわけでもありませんし、中傷などはしない心算^{もり}なので許してください。

あ、あと電子小説を見る際は画面から十分に離れて見るようにしてください。

では本編をどうぞ。

ブローグく黒くて艶々したアイツく

物語の始まりというものは何時も突然である。

例えば、伝説の魔法使いの使い魔として選ばれた少年は、秋葉原の路地で『突然』現れた鏡に捕らわれ遙か遠い異世界【ハルケギニア】へと連れ去られた。

例えば、人より靈感が強いただけだった少年は虚や死神なんて存在に『突然』出会ってしまった所為で、世界の裏側に関わっていく事になった。

そしてそう、

例えばこんな感じに・・・

*

「ふえ・・・ふえ・・・ふえつくしよん!!」

鼻の辺りを漂うダストに盛大にクシャミをしながら青年——あしぞわ 芦沢幸助は溜らずに目を覚ました。

夜かと思うほどに視界は暗く、僅かに灯っている赤い光源によってようやく辺りを見渡せる程度だ。

「——つて、何処だここ？」

寢覚めの朦朧もつさうとした意識から復帰した幸助は、ようやく自分の置かれている状況に思考が向いて行く。

目の前にあるのは広さ10畳程の一室。部屋の右奥のほうに自動ドアらしき金属の扉があり、左奥に同じく金属製のロッカーが3つ設置してある。そして自分のいるベッドと、どうやらここが寢室の類である事はなんとなくで分かった。電気が落ちているようで部屋は薄暗く、非常灯らしき赤い光源が部屋全体を赤く染め上げていた。

部屋全体に目で見て分かるような埃が層になっている所、どうやら長い間人の手が入っていないようだ。

——やばい、状況が分からない。・・・とりあえず、落ち着いて情報を整理してみるか。

ええと、確か今日は。月。日。会社の休日だからって事でいつもの様に家でネットに没頭していたと。それで昼ごろに腹が減ってきたから弁当買いに行くか、って事で近くのコンビニまで出かけようと

したと。それから・・・。

「・・・ああ”！思い出せない！」

それより先の事がどうしても思い出せず、ガリガリと頭を掻きながら悔しそうに言葉を漏らす。

「・・・まあ考えても仕方ないか。とりあえず、まずは情報か・・・」

そう一先ずの結論をつけた幸助は、腰掛けたベッドから立ち上がり改めてじっくりと辺りを調べていった。

壁面を見るとコンクリートで出来ており、経年劣化のようにひび割れや崩れている部分が目に付く。天井には何かの配管がむき出しで設置されている所、一般の家というより研究室や更衣室など公共の施設といった印象を受ける。赤い非常灯が付いている辺りその線で間違いないように思えた。

自動ドアらしき金属の扉の横には今時には珍しいブラウン管タイプのモニターとキーボードが設置されていた。

恐る恐るといった様子でキーボードに触れると、突然ブウンとモニ

ターが起動しだし思わず「うおっ」と軽く仰け反った。明るさの急な変化に目が慣れ始めモニター画面を注視すると、そこには英単語と意味不明な記号の羅列が乱雑に表示されている。

「アレ？これって……。」

暗い画面に並ぶ緑色の文字の羅列に、幸助は既視感を感じた。

もしやと思い、試しにキーボードを操作する。方向キーを横に動かす度に反転する文字が変わる。とりあえず一つ単語を選択、画面右にMissingの表示。【2/5】と出ているので2文字は合っているのだろう。操作を続ける。近くの単語を選択し、Enter。またもMissing、表示は【1/5】。

今度は「」で囲われた部分にキャレットを合わせる。そうするとカッコ内の文字まで全部が反転した。Enter。表示される操作記録は^{単語を}dud ^{削除}removed。

「やっぱり……。」

操作を続ける。カッコで囲われた部分を選択。Enter。——dud removed。選択。Enter。——dud removed。そうしていくと、表示される単語が一つになった。

残った単語を選択。Enter。

ピコン

軽い電子音と共に硬く閉ざされた自動ドアがシュー、と排気音を立てて下に降りる。どうやらハッキングは成功したようだ。

「・・・しかし、なんでfailoutのハッキングが通用するんだ？」

幸助は軽く手を顎に当てると、そう呟く。幸助のやった手順は【failout3】というゲームに存在するコンピュータのロック解除の方法だ。

核戦争後の荒廃した世界を舞台にプレイヤーが冒険をする典型的な箱庭系ゲームで、幸助はとある事情でプレイは出来なかったもののプレイ動画を見ていた為ハッキングのやり方を知っていた。しかし本来ならこんな方法ではハッキングなど出来るはずが無い。

———手の込んだ悪戯か、はたまたゲームの世界に迷い込んだか・・・。

「———まあ、それは無いとして。・・・いずれにしろ、調べるしかないんだけどな。」

そう言うと幸助はドアの向こうへと足を進めた。部屋を出ると見え

てくるのは左右に伸びる一本の長い廊下だった。廊下に隣接するように此処と同じような自動ドアが何個か設置しており、右手の方向は行き止まり。左手の方向は右の方へと続いているように見える。

——ガサガサッ

「ん？」

何か物音が聞こえたような気がしてその方向を振り向く。聞こえてきた方向は廊下左手の曲がり角の向こう側。それは徐々にこちら側へと近づいてくる。感覚的には昆虫に近いように思えるが、だとしたらそもそも距離的に聞こえるはずが無い。

「——いや、まさか……。」

頭を過ぎった嫌な予感にツーンと冷や汗が流れる。此処がもし【failout】の世界を再現していた場合、そのサイズの昆虫は存在する。

——ガサガサッ

放射能の影響か、ウイルス兵器による影響か。本来ならありえないサイズに巨大化してしまったヤツラ。黒光りする気色悪いボディーに、しきりに動く頭部の触覚。一匹逃せば数カ月後には200000

匹に増えると言われるソイツ。ある意味【fallout】中、最大の敵。

巨大ゴキブリ『ラッドローチ』

暗い通路の向こう側からガサガサと音を立てて現れたヤツ。大きさは小型犬程度だろうか。赤い非常灯に照らされたラッドローチは不気味さを120%増しているように思える。長く伸びた触覚をしきりに動かしながらフラフラと曲がり角を徘徊していた。

——いや、まだ見つかっていない……。隠れるか？

息を殺し、振り返らぬようゆっくりとバックする。わずか数歩後ろに下がるだけなのに時間が妙に長く感じてしまう。アレが誰かの手の込んだ玩具だったとしても、小型犬なみの大きさのリアルなゴキブリが居たら普通に引く。

——ゆっくり……。慎重に……

シューー、カシャン！

人感センサーでも付いているのか、ある程度下がった所でドアは閉

まった。ドアの向こう側からガサガサ、カンカンとドアに向かって突撃を試みるラッドローチの音が聞こえてくる。どうやらセンサーはラッドローチには反応しないようだ。

「フー、全く心臓に悪い。」

幸助は溜めた息を吐きあご下を拭^{ぬぐ}う。ここにはたぶん連れて来られたのだろうが、目的がいまいち分からない。ただ、ここがfall outの世界観を忠実に再現している事だけは理解できた。

「——何か武器になる物でもないか……。」

アレは恐らく倒すまで付き纏うのだろうが、さすがに素手では触りたくない。部屋の中を見回し、未だに手を付けていなかったロッカーが目にとまった。幸いコインロッカーに鍵は掛かっていなかったようで、すんなりと開いた。

入っているのはコインロッカー3つで、バット×1・ツナギ×1・拳銃×1。

「……やけに重いな。」

銃器関係には全くの素人なのでこれが【拳銃】であるとは分からないが、手にずしりと来る重さは妙にリアルだ。まるで本物であ

るかのように。

ゴクリ・・・

「・・・まあ、どっちにしる使わんな。」

幸助は本物はもちろんの事、モデルガンさえともに握った事の無い人間である。『使い慣れていない代物を使うより、多少使った事のある物を』という事で、使用するのは木製のバット。感触を確かめるようにグリップを握りこみ、真下へと振り下ろす。

「よし、これでいいか。」

準備が整ったので再度ドアの前に立つ。時たまガサガサ、と近くで音がするので近くにいるのだろ。ドアが閉まった後にこちらへ向かってきた様子から、音に反応していると思われた。ならば勝負はドアが開いた瞬間。

振り向いた逆の方向から襲われる可能性もある。進入路を限定する為、入り口前で待ち伏せの方がいいだろう。

「フー、・・・よし！」

覚悟を決めドアの前に立つ。シューーという排気音と共にドアが開いた。と同時にガサガサ、と動き出すラッドローチ。開いた所で少し後ろへ下がり、ラッドローチが来るのを待つ。

——さあ、来い！

振り下ろす構えで待ち伏せる。数瞬の後、右側からラッドローチが顔を覗かせた。——今だ！

「っせい！」

勢いよく振り下ろされたバットは、見事ラッドローチの頭部付近へとクリーンヒット。グチャ、っという音と共に飛び散る液体。キィーイーと甲高い断末魔を上げるラッドローチに再度フルスイング。何度も、何度も。

やがて断末魔の聞こえなくなり、抵抗らしい抵抗がなくなった頃。ようやくバットを振り下ろす作業をやめた幸助は、そのままその場にへたり込んだ。

「つくはあ！はあ、はあ……。ったくあり得ねえ。」

そう言っただけ握り締めたバットに目をやる。バットの先端には大

量に付いたラッドローチの体液。そう、叩いた時にも感じたが無機物を叩く感触ではなかった。間違いないと思うが、アレは生物だ。

しかしあり得ない。前にYouTubeの投稿動画に「世界最大のゴキブリ」というのがあったが、そのサイズはどう見ても手のひらサイズだった。間違っても小型犬並の大きさなどあり得ない。

—— 遺伝子改良されたゴキブリとか？

「—— こりゃあ、ゲームの世界に飛ばされたってのも強^{あなが}ち間違いじゃないかもな……。」

そう言った後フウ、と一息ついた幸助はのっそりと立ち上がった。どれだけ憶測したところで結局は情報が無ければ判断は出来ない。

原点に戻った彼は、今度こそその部屋を後にした。

ブログく黒くて艶々したアイツく（後書き）

どうもはじめまして、代継 洋佑と申します。

勢いで書いてしまいました。反省はしております。後悔もしております。

なんで書きちゃったんだろ……。この後どうしよう……。。

……。まあなんとかなるか？

とか、そんな感じで。

次回へと続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8636y/>

fallout ~ 『異世界放浪』モノでgeckを使用した場合 ~

2011年11月25日22時57分発行